

ビザンツ艦隊をめぐる考察

——七世紀後半—八世紀初頭を中心に——

はじめに

ビザンツ帝国の歴史において七—八世紀は不明な点がひととき多い時代である。例えばテマ制の起源しかり、イコノクラスムの実態しかりである。筆者はそんな不明瞭な時代について、テマ軍制の成立と国家のありかたをめぐるいくつか考察を発表してきた^①。それは不明瞭かつ不十分な事実から、どれだけ説得力のある推測や仮説を引き出せるか、試行錯誤の連続であった。

今回取り上げるテーマも、同じく軍事制度で、テマとも関係が深いビザンツ艦隊(ないし海軍)である。この艦隊という存在も、七—八世紀の厳しい史料状況のため、何かと実態が不明瞭な対象だといえる。考察を始めるにあたって、まずその点を確認しておきたい。

中 谷 功 治

このように容易ではないビザンツ艦隊の考察ではあるが、関連する研究は近年それなりに活発である。とりわけ、技術史の専門家ブライヤーがジョフリーズと共同で発表した大著『ドロモンの時代 ビザンツ海軍 五〇〇頃—一二〇四年』(二〇〇六年)は、地中海海域史の概説としても、専門的な船舶技術史としても、従来の研究を集大成して注目される^②。また、これまでの一國史的で制度史中心の枠組みを廃し、より広い視野に立った海洋史としての共同研究も盛んで、その成果が相次いで刊行されている^③。

けれども、本稿が取り組むのは伝統的な制度史の方である。こちらも一定の間隔で研究論文は発表されているが、基本研究は四〇年以上前にさかのぼる。奇しくも一九六六年に公刊されたアルヴェレルとアントニアデイスルビビクという二人の女性の業績が事実上の出発点となった。アルヴェレルは『ビザンツと

海』において、六世紀以降の帝国史全体の中で海軍の制度的発展を跡づけ、一方のアントニアディス・ビビクーは七―八世紀における「海のテマ」の成立に焦点を絞って、詳細なモノグラフィ―『ビザンツ海洋史研究——「カラヴィシアンノイテマ」に関連して』を発表した。両研究は現在においても、ビザンツ海軍史の基本文献であると言ってよい。^④

逆に言うならば、両研究から半世紀近くを経た現在でも、ビザンツ海軍史研究に顕著な進展は見られないことになる。ただし、この間に散発的に公開されてきたいくつかの制度史研究によって、現在の通説は形成された。^⑤

一方、最近この国において中期ビザンツ帝国史を海洋の視点から捉える研究をいくつか世に問うているのが小林功氏である。とりわけコンスタンス二世 [3691] とレオン三世 [692] という皇帝に焦点を当てた研究が国内の有力学会誌に掲載されている。^⑥

氏の研究で特に高く評価できるのが、ギリシア語・ラテン語以外のアラビア語やシリア語の史料と、関連する分野の研究を網羅的に渉獵するという研究姿勢である。そこから提示される新たな事実や視点は貴重で、この点について筆者が付け加えて議論を余る余地はあまりない。七世紀から八世紀前半にかけての東西地中海におけるビザンツ艦隊の活躍ならびに各地のイスラーム艦隊の

動向が、小林氏の研究の中で詳しく跡づけられており、本稿もそれらを踏まえて考察を進めていかなければならない。ただし、考察を受けた最終的な結論部分においては、筆者と評価が分かれたり、再検討が必要であるケースもあるように思う。

本稿の目的は、「海のテマ」の成立（八世紀前半）に至るビザンツ艦隊の実像に迫ること、そしてそれらが制度的な発展とどのように関連しているのか、あるいはしていないのかを明確にすることにある。以下、七世紀中頃以降の皇帝の治世ごとに、ビザンツ艦隊とテマの展開について具体的に史料に即して考察していくことにするが、その前に制度史上問題となる論点についてまとめておこう。^⑦

① 「テマ反乱とビザンツ帝国——「テマシステム」の展開——」『西洋史学』一四四、一九八七年、二二―四〇頁；「テマからテマ制へ——テマ制度の成立時期をめぐって——」『待兼山論叢』（史学篇）二一、一九八七年、二九―五〇頁；「テマの発展——軍制から見たビザンティオン帝国——」『古代文化』四二―二、一九八九年、八―二二頁。

② Pryor, J. H. & M. E. Jefferys, *The Age of the ΔΡΟΜΩΝ: The Byzantine Navy ca 500-1204*, Leiden/Boston, 2006. cf. Pryor, J. H., *Geography, Technology, and War: Studies in the Maritime of the Mediterranean, 649-1571*, Cambridge, 1988.

③ 例へば Hattendorf, J. B. & R. W. Unger (eds.), *War at Sea in the*

Middle Ages and the Renaissance, Woodbridge, 2003. Chrysotomides, J., Dendinos, C. & J. Harris (eds), *The Greek Islands and the Sea: Proceedings of the First International Colloquium University of London, 21-22 September 2001*, Cambridge, 2004; Christou, S., Apostolopoulos, A. & V. Christides, (eds), *Treasures of Arab-Byzantine Navigation*, Athens, 2004. * * * を含むニコニコン海軍史の174頁、Malamut, E. *Les Iles de l'Empire byzantin VIII^e-XIV^e siècles*, 2 vols., Paris, 1988 56-63。

④ Ahweller, H. *Byzance et la mer, la maritime de guerre, la politique et les institutions maritimes de Byzance aux VII^e-XV^e siècles*, Paris, 1966. Antoniadis-Bibicou, H. *Études d'histoire maritime de Byzance: À propos du "Thème des Carabiens"*, Paris, 1966. なお同研究については、相野幸三氏による詳細な紹介論文があり、野澤三「ビザンツ帝国の海軍組織について——最近のビザンツ海軍史研究を中心に——」『関西学報』1117、1970年、87-111頁(『リベラ』)および関西学報大学に提出された博士論文「ビザンツ帝国海軍組織の研究」(1970年)を参考にゆずつた。また、アルヴェールの著書については次の書評も参照のこと。米田治泰評「ビザンツと海」『西洋史学』173、1967年、69-71頁。

⑤ cf. Savvides, A. G. C., *The Secular Prosopography of the Byzantine Maritime Theme of the Carabians / Cibyraeosis, Byzantinistica* 59, 1998, pp.24-45. むしろこの時代全体のブロンボグラフィー研究が公刊されており、本稿でも登場人物についてはこの研究での番号を「」で付する。Lilie, R.-J. et al. (Hrsg.), *Prosopographie der mittelbyzantinischen Zeit, Abteilung I (641-867), Prolegomena und 6 Bde.*, Berlin/Brandenburg, 1998-2002.

⑥ 小林功「コンスタンヌス二世のシチリア進出——七世紀中葉のビザンツ帝国と中部地中海——」『史料』181、1998年、144-164頁(以下「コンスタンヌス二世」を略記)；同「最後の「海の軍人皇帝」——ネオン三世とビザンツ艦隊」『ネリエン』145-171、2002年、18-36頁(以下「ネオン三世」を略記)。

⑦ 今回、筆者が主に参考にしたのは他の比較的新しい研究論文は次のとおりである。

Kolias, T. G. *Die byzantinische Kriegsmarine, Ihre Bedeutung im Verteidigungssystem von Byzanz*, in Chrysos, E., Letsios, D., Richter, H. A. & R. Stupperich (Hrsg.) *Griechenland und das Meer*, Mannheim/Mohndsee, 1999, pp.133-139. White, M., *The "Theme" Carabisianni*, in Christidou et al. (eds.), *op. cit.*, pp.139-145; Cosenlino, S. *La flotte byzantine face à l'expansion musulmane. Aspects d'histoire institutionnelle et sociale (VII^e-X^e siècles)*, *Byzantinische Forschungen* 28, 2004, pp.3-20.

* * * それ以前の研究については注⑥のサヴァニスの論文を参照された。

一 ビザンツ海軍成立期の諸問題と史料状況

七-八世紀のビザンツ帝国において、主要史料となるのは「テオファネスの年代記」^①をはじめとするギリシア語の記述史料である。そこでは、海軍にかかわる情報の大半は、遠征のたびに「艦隊 ploumon」の編成と司令官の指名、そしてその具体的な活動の記述、という形を取るものが多々。

一方で、常設艦隊らしきものがラテン語史料や聖人伝史料に登場し、さらに印章資料からも確認がとれる。一般にこの艦隊は「カラビシアノイ」(ラテン語で Karab(v)isiani)と呼ばれる。聖人伝の『聖デメトリオスの奇蹟』に次のような一節がある。

「皇帝は) 艦船 Karaboi のストラテゴス、シシンニオス [6714] に、彼の指揮下にある水兵 (船員) たち karabisianoi とともに、テサロニケに行くように命じた。(中略) そこで最も傑出したストラテゴスのシシンニオスはヘラスの地域から出発して、大変長きにわたって無人であったスキアトス島に枝の主日に到着した」(括弧内は中谷による補足。以下同様)

ここでは、艦船カラボイのストラテゴス(將軍)という表現が使われているが、そのすぐ後に「水兵たち(カラビシアノイ)」も登場しているので、この箇所はカラビシアノイ艦隊とその提督に言及したものとするのが通説となっている。ただし、この出来事がいづ生じたのかをめぐっては様々な議論があるが、そもそもこの情報自体が聖人伝史料からのものであり、時期を特定したり、傍証なしに事実と認めるには危険が伴う。

次にラテン語史料としては、『教皇の書(教皇列伝)』に同じ艦隊らしきものが登場する。七一年に教皇コンスタンティヌス一世 [1170] 一行がコンスタンティノープルを訪問した際、エーゲ

海のケオス(現ケア)島でバトリキオス(最上級の爵位)でカラビシアノイのストラテゴス、テオフィロス [8176] Theophilus patricius et strategos Caravianorum が一行を出迎え、首都まで随行した。^④

さらに、ユスティニアノス二世 [3556] の最初の治世(六八五—六九五年)の六八七年、彼名義の教皇コノン宛て命令書簡 *mis-* *so* に列挙された軍隊名の中に、やはり Carabisiani が登場する。^⑤ただし、当該史料には元々 Carabisiani ではなく Cabarisiani と記されていた。このことをめぐっても種々議論があったが、研究史上ではギリシア語のカラビシアノイの転写ミスとして扱われることが多い。^⑥

また七—八世紀頃の印章資料として、このカラビシアノイのストラテゴスとその代理官(エク・プロップ)^⑦も含めて、数名分の鉛印章が残されている。^⑧

我々の手元にある情報は以上である。絶対量としては決して多くはないが、それでも七世紀後半頃から八世紀前半にかけて「カラビシアノイ」という名前の艦隊とその提督が存在していたことは確かであろう。

カラビシアノイに関連する問題として、それが「テマ」なのかどうかがある。例えば、小アジアのテマニアナトリコイの司令官

は、strategos ton Anatolikon のように表記されるが、カラビシアノイのストラテーゴスもこれと同様に strategos ton Karabisianon と表現されることが多い。このことからカラビシアノイをテマ (軍管区) とみなしてよいか。見なしていいのならその管轄領域はどこか、という問題である。現在の通説的理解では、あくまでカラビシアノイは艦隊ないしその指揮権を指すのであって、特定の管轄領域を有する存在ではなかったと推測している。筆者もそう捉えているが、この点についてもやはり情報は不足している。^④

カラビシアノイと違い、最初の「海のテマ」として八世紀前半頃に登場するキビュライオタイ Kibyrratai についてもいくつか確認しておきたい。その名前の由来は小アジア南岸の町にあるらしいが、^⑤他の小アジアのテマの多くと同じくギリシア語の複数形で登場する。後の時代になるが、一〇世紀に皇帝コンスタンティノス七世自身が執筆した『テマについて』^⑥の記述からは、キビュライオタイテマの管轄領域が小アジア南岸にあったことが判明する。

このキビュライオタイが史料上最初に確認できるのは、六九八年の艦隊反乱時の記述である。そこには、キビュライオタイのドゥルンガリオス drungarios のアブシマロス (後のテイベリオス

二世 [883]) が皇帝に擁立された、^⑦とある。ドゥルンガリオスというのは、ストラテーゴスより下位の指揮権者の名称で、地上軍の上級将官としても用いられるが、艦隊の提督としても登場する。^⑧

ところで、アブシマロスはこの時点では (一) キビュライオタイのテマのストラテーゴスの指揮下にあったのだろうか。あるいは (二) カラビシアノイのストラテーゴスの指揮下にあったのか。さらにまた、(三) キビュライオタイはすでに独立していたが指揮官の名称がまだドゥルンガリオスであったとも考えられる。(二) が通説であるが、(一) や (三) も十分に成立可能である。

以上、七世紀後半から八世紀初頭にかけて、ビザンツ艦隊関係の制度的な情報をまとめてみた。繰り返すが、カラビシアノイにせよ、キビュライオタイにせよ、この時期の艦隊や「海のテマ」について、誰もが納得できる判断を下すには史料情報が不足している。ともかく、以上のことを確認した上で、次章からは皇帝の治世ごとに艦隊の活動や海上作戦などに焦点を絞って具体的に考察することしよう。

④ Boor, C. de (ed), *Theophanis Chronographia*, vol.1, 1883, Leipzig (以下 *Theophanes* と略記)。この年代記についてより詳しくは、次の訳と注釈を参照されたい。Mango, C. & R. Scott, *The Chronicle of*

- Theophanes, Confessor: Byzantine and Near Eastern History, AD 284-813*, Oxford, 1997 (佐藤 Mango 訳監訳). Rochow, I. *Byzanz im 8. Jahrhundert in der Sicht des Theophanes, Quellenkritisch-historischer Kommentar zu den Jahren 715-813*, Berlin, 1991. 444p. 『テオフィオノスの年代記』と並ぶ7世紀の2つを記述を残した総主教ニヤノキロス [5301] の記録と7つ『歴史抄録』がある。cf. Mango, C. (ed./tr.), *Nikephoros Patriarch of Constantinople, Short History*, Washington D.C., 1990 (佐藤 Nikephoros 訳監訳).
- ② Lemerle, P. (ed.), *Les plus anciens recueils des miracles de saint Demetris*, 2 vols., Paris, 1979/1981, vol.1. texte, [294] pp.230-231, 5. vol.2. commentaire, pp.154-163. cf. Savvides, op. cit., no.1.
- ③ Antoniadis-Bibicou, *op. cit.*, pp.63-98 (大西田一正訳); Ahweiler, *op. cit.*, pp.27-30 (上) 1-4頁; Charanis, P., On the Origins of the Theme of the Carabisiani, *Studi Bizantini e neellenici* 9, 1957, pp. 72-75 (上田洋一郎訳); Lemerle, *op. cit.*, vol.2, pp.154-162 (大西田一正訳); Foss, C., 'Karavisiatoi', in: Kazhdan, A. et al. (eds.), *Oxford Dictionary of Byzantium* (佐藤 ODB 訳監訳), 3 vols., Washington D. C., 1991, pp.1105-6 (大西田一正訳).
- ④ Duchesne, L. (ed.), *Liber pontificalis*, 3 vols., Paris, 1886, vol.1, p. 390. cf. Savvides, op. cit., no.6.
- ⑤ Mansi, J. D. (ed.), *Sacrorum Conciliorum Nova et Amplissima Collectio*, Firenze, 1759-1788, (rep. 1901), tom. XI, 737B-738A. (= Riedinger, R. (ed.), *Concilium universale constantinopolitanum tertium*, Berlin, 1992 [Acta conciliorum oecumenicorum, ser.2, v.2] pars 2, p.886.
- ⑥ かなり詳しくは拙稿「レオン三世政権とナレ」『関西学院史学』三八、二〇一一年、第二章を参照された。
- ⑦ Haldon, J. F., *Byzantine Praetorians*, Bonn, 1984, p.165 and p.428 n. 316. ナキロス 譯と上 2 つは Antoniadis-Bibicou, *op. cit.*, pp. 65-66; Tynbee, A., *Constantine Porphyrogenitus and His World*, London, 1973, pp.227-228 and n.6 を参照(上)。
- ⑧ cf. Kazhdan, A., 'ek prosopou', *ODB*, p.683.
- ⑨ スパタリオスのアドリアノス [575] (九世紀前半) 、無名のプロトスパタリオスのアマラチス [575] (九世紀前半) 、無名のパトリキオス [10883] (八世紀前半) 、もう一人無名のパトリキオス [10878] (八世紀前半) 、同じく無名の皇帝のスパタリオス (より低く爵位) [10878] (八世紀前半) 、皇帝のスパタリオスでステイマテーション代理のネオステス [7933] (八世紀) 、同じ無名の代理者(エン・プロンテ) [10809] (十一八世紀) 。cf. Savvides, op. cit., nos. 4, 5; Kazhdan, 'spatharios', in *ODB*, pp.1935-1936.
- ⑩ cf. Nesbitt, J. and N. Oikonomides (eds.), *Catalogue of Byzantine Seals at Dumbarton Oaks and in the Fogg Museum of Art*, vol.2. South of the Balkan, the Island, South of Asia Minor, Washington D. C., 1994, pp.150-151. ナチコントノ 譯と高橋領域 2 つは Antoniadis-Bibicou, *op. cit.*, p.72; Ahweiler, *op. cit.*, p.25 を参照(上)。
- ⑪ Yannopoulos, P. A., Cibyrra et Cibyrraeotes, *Byzantion* 61-2, 1991, pp.520-529.
- ⑫ Pertusi, A. (ed.), *Constantino Porfirogenito De thematibus*, Vaticano, 1952, ch.XIV, pp.78-79.
- ⑬ *Theophanes*, p.370 (AM 6190), Nikephoros, ch.41.
- ⑭ 例えは、後述成立する帝國中央艦隊の提督フェナルンガリオスでも cf. Kazhdan, *ODB*, 'droungarios', pp.663-4.

二 コンスタンス二世・コンスタンティノス四世と艦隊

帝国が海上において外敵からまとまった形で攻撃を受け、対応を迫られるようになるのは七世紀中盤、コンスタンス二世の治世(六四二—六六八年)からである。ここでの脅威とは、やがてウマイヤ朝を樹立するシリア総督のムアーウィアの艦隊であった。実は、当初においては、シリア方面へはビザンツ艦隊がしばしば出撃し、脅威を与えるなど優位に立っていた。これに対してムアーウィアがイスラーム艦隊を創設して対抗したのである。

イスラーム艦隊の挑戦を受けて立つ側の皇帝コンスタンス二世は即位した時は一〇歳の少年であったが、ムアーウィアが繰り出した艦隊との決戦の時点、六五五年には立派に成人し、自ら艦船に乗り込んで出撃した。しかし、小アジア南西リュキア沖での海戦の結果はビザンツ側の惨敗であった。皇帝は衣服を人と取り替えて、ようやく戦線を離脱することができたという。^①このいわゆる「マストの戦い」は、皇帝自身が直接艦隊決戦に臨んだ希有な例であり、大艦隊同士での決戦ということになると紀元前三一年のアクティウムの海戦以来の出来事かもしれない。

この敗退によって、それまでシリア、パレスティナ方面に展開していたビザンツ艦隊も方向転換を余儀なくされただろう。幸い

イスラーム側に内紛が生じて、ビザンツ側に態勢を立て直す時間的余裕が生じた。コンスタンス二世治下のこの時期に何らかの海軍組織上の改変、例えばカラビシアーノイの創設などがあったのだろうか(もちろん、敗退した艦隊がカラビシアーノイであったと考えることもできる)^②。しかし、すべては藪の中である。

手痛い敗北から数年を経た六六一—二年、コンスタンス帝は突如軍隊を率いて首都コンスタンティノープルを離れた。^③その目的は都をローマに移すとも、最初から行き先はシチリアだったとも述べられる。^④『テオフィアネスの年代記』をはじめとする各史料は、原因として首都での皇帝の不人気を挙げている。いずれにせよ、史料に登場する二人の政府要人、コロネイアのテオドロス [732] とクビクラリオス(「臣官侍従」)のアンドレアス [333] は、妻子を連れ出そうとする皇帝を諫めて、両名は皇帝の家族とともに首都に留まることになった。^⑤

皇帝がローマに到着したのは六六三年七月のことであったが、滞在は一二日間のみで、一行はナポリへと移動した。その後、皇帝の軍隊はシチリア島に向かい、同年シラクサに居を構えた。^⑥その後、シチリア島の一部がイスラーム軍に占領されるという事態が起こっている^⑦ので、北アフリカ方面の敵との戦いを準備し始めた可能性はある。

しかし、不明な点も多い。かなりの兵力（小林氏は二万と予想）を伴っての、しかも長期の行軍である。すでにローマ到着時点で一年以上を経過しており、さらにシラクサでの滞在期間は五年あまりに及んだ。^⑧それほど長期間、しかもめぼしい戦闘もない中、遠征軍の士気を維持し続けるのは並大抵ではなかつただろう。将兵に不満はなかつたのだろうか。^⑨

いや、不満は確実に高じつあつたようだ。六六八年、コンスタンズ二世はシラクサにおいて暗殺されるのである。彼の直接の暗殺者はトロイロス [3824] の息子アンドレアス [3825] とのみ記されているが、その後の展開から見ても、偶発的な事件というよりも計画的な犯行であつたと思われる。コンスタンズ二世、享年三七歳であつた。^⑩

軍隊は、皇帝の死去を知ると亡骸を埋葬して、アルメニア人のミジジオス [5163] という人物を皇帝に据えたという。^⑪

さて、『テオフアネスの年代記』は、この頃首都にいた新帝コンスタンティノス四世 [3702]（在位六六八―七八五年）の動向を次のように伝える。「コンスタンティノスは彼の父の死を聞くのと、大艦隊とともにシチリアに到着し、ミジジオスを捕らえて自身の父の殺害者たちとともに殺させた。そして西方を安定させてコンスタンティノーブルへと急ぎ（戻つた）^⑫」。このシチリア遠征

の詳細は不明である。当時二〇歳にも達していなかつた若き皇帝は大軍を率いて海を渡つたのだろうか。

この事実には傍証がある。シリア系の史料テルムマールのデオニュシオスがこの事件について伝えている。コンスタンズ二世の暗殺を受け、「そこでローマ人たちは王にパトリキオスでミジジ（オス）と呼ばれるアルメニア人を選んだ。コンスタンティノス（四世）は自分の父親の暗殺を聞くと、大挙してシチリアに航海し、ミジジ（オス）を捕らえて処刑し、また父親の死に責任のある者たち全員をも処刑した。その後、彼はコンスタンティノーブルに戻つた^⑬」。またほぼ同様の記述が同じくシリア系の『シリア人ミカエルの年代記』やギリシア語の『修道士ゲオルギオスの年代記』などで確認できる。^⑭

やはり皇帝は親征をしたのか。けれども、即座に首都から大艦隊が出動した点には少なからず違和感を覚える。実は、コンスタンティノス四世による遠征の存在を疑つた研究者が一世紀前にいた。アラビア語史料にも精通する著名なブルックスである。^⑮ブルックスは、遠征は事実としてありえないと指摘した。まず、定期的に。この前年にはアルメニアコイテマのストラテゴス、サポリオスの反乱が勃発しており、またウマイヤ朝を樹立したカリフのムーアウィアは、当時毎年のように遠征軍を小アジアへと派

造していた。サボリオス反乱とも時を同じくしてその一部隊は首都対岸のカルケドンにまで進軍したという。¹⁸⁾ 果たしてこのような時に、千年前のアテナイよろしく、大艦隊をシチリアのシラクサへと派遣する時間的、兵站的余裕が帝国政府にあったのだろうか。

さらにブルックスは史料の性質にも言及する。コンスタンティノス四世の遠征を伝えるものは東方シリア系の史料が中心であり、『テオフアネスの年代記』や『修道士ゲオルギオスの年代記』もそれを情報源にしているという。これに対しイタリア側のラテン語史料にはこの遠征についての記述が一切見られない。ブルックスはシリア系の史料に誤解が生じた理由についても細かく分析している。

一方、パウルス・デイアコヌスの『ランゴバルド人の歴史』には次のように記されている。「それで、シラクサで皇帝コンスタンスが殺害されると、シチリアでメケティウス（ミジジオス）が帝権を奪ったが、東方の軍隊なしに自発的であった。彼に対してイタリアの軍隊がイストリアやカンパニア地方から、さらにアフリカやサルディニア地方からも（他の軍隊が）シラクサに到来し、彼の命を奪った。彼の告発者たちによって多くの者たちが斬首されてコンスタンティノーブルにもたらされ、これらとともに偽の皇帝の首も同じく海路運ばれた」（さらに、『教皇の書』もほぼ同様の記述となっている。¹⁹⁾）

筆者にはこちらの方がより具体的で、蓋然性も高いと感じられる。おそらく新皇帝は首都にいたのであり、それゆえに叛徒たちの首を運ぶ必要があったのだろう。ともあれ、コンスタンティノス四世による即座の大規模な親征を主張するのであれば、ブルックス説に適切に反論しておく必要はあるだろう。²⁰⁾

さて、コンスタンティノス四世の治世はその後、いよいよ苦境に入ってしまった。イスラーム軍の遠征は、六七四年から五年連続で首都封鎖を実施する。攻め手は艦隊をともなう首都近郊に到来し、夏場はコンスタンティノーブル城塞を前に戦い、冬になると近くのキュジコスで越冬、という作戦を繰り返した。²¹⁾ これに対して、コンスタンティノス四世は、火炎放射の筒、いわゆる「ギリシア火」搭載の大型二段櫓船を建造させたというが、²²⁾ 実際の戦闘記述に艦隊の活動はあまり登場しない。

次に艦隊の動向が確認できるのは六八〇年である。この年、ブルガール人がドナウ川を越えて南下してきた。²³⁾ 皇帝は全テマ軍（テマタ）にトラキア側に渡るよう命じる一方、艦隊を厳装し、陸と海からブルガール人たちに向かっていった。艦船で出撃した皇帝は、上陸して敵軍と対峙した。しかし、若い皇帝に通風の症状が出て、彼は五隻の快速艦ドロモンとともにメセンブリア市へと引き返した。軍隊内には、皇帝が逃亡したとの噂が広まった

め、帝国軍は総崩れとなったという。^② 皇帝が亡くなったのはその五年後、三〇代半ばであった。

以上が、年代記などに登場するコンスタンス二世とコンスタンティノス四世の艦隊との関わりを示す箇所のみである。カラビシアノイが首都防衛との関係ですでに創設されていたのであるか。しかし、『聖デメトリオスの奇蹟』ではそのストラテーターゴスはヘラス、つまりギリシアの領域から出動している。サモス島という説もあるが、印章資料の断片だけでは説得力は強くない。我々の手元に残る情報だけでは、カラビシアノイという常設艦隊の具体的な姿を復元して示すことは困難なようである。

- ① *Theophanes*, pp.345-346 (AM 6146).
- ② *ニコクター*は艦隊の創設をコンスタンヌス二世治下の六四八―六五四年の頃とす(Antoniadis-Bibicou, *op. cit.*, p.78) cf. Antoniadis-Bibicou, H. propos de la premiere mention d'un "Stratège des Caravissiens", *Byzantinostudica* 27-1, 1966, pp.71-91. 一方、アルヴェールによればカラビシアノイの創設は七世紀末、あるいはコンスタンティノス四世治下の頃(Aherweiler, *op. cit.*, p.24)。最近では、ロマンティンが改革説を支持する(Cosentino, S. Constans II and the Byzantine Navy, *Byzantinische Zeitschrift* 100, 2007, pp.577-603)。ケーギンらの反論もあつた(Kaegi, W. E. Jr. *Muslim Expansion and Byzantine Collapse in North Africa*, Cambridge/New York, 2010, p.196)。
- ③ *Theophanes*, p.348 (AM 6153).

④ 小林氏は目的地は「当初からシチリア島にあった」(「コンスタンス二世」一五三頁)と言うが、この時点でイスラーム側の艦隊のシチリアへの攻撃は六五二―三年に一度あるのみで、しかもそれが事実かどうかをめぐって論争がある。cf. Cosentino, Constans II and the Byzantine Navy, p.585.

⑤ *Theophanes*, p.351 (AM 6160). cf. Kazhdan, 'Koubikourarios', *ODB*, p.1154.

⑥ *Liber pontificalis*, vol.1, pp.343-344. なお、イタリア到着まで長く時間を要したのは、バルカン半島で「慎重な準備」(「コンスタンス二世」一五三頁)をしていたのだと小林氏は言っている。しかし一切は不明である。

⑦ *Theophanes*, p.348 (AM 6155).

⑧ *Theophanes*, p.351 (AM 6160). *Liber pontificalis*, *ibid.*

⑨ 短期間のローマ帝在中に皇帝は、ローマ市内の聖ペテロ聖堂の青銅瓦をはじめ、多くの聖堂から調度品など金目の物を奪っていった。シラクサ移動後もイタリア・アフリカをも含めて付近から税金を取り立てたという(*Liber pontificalis*, *ibid.*)。ネリッパは「航海税」・「航海税」・「航海税」を含まれてはいたが、最近「キッカマンが」の「航海税」に関連して、コンスタンヌス二世によるカラビシアノイ艦隊創設説論を展開しているが(Zuckerman, C. Learning from the Enemy and More: Studies in "Dark Centuries" Byzantium, *Millennium Jahrbuch* Bd.2, 2005, pp.79-135, esp.107-108)。本租税の具体的な中味は推測するしかないであろう。艦隊の建設が目的であったとするのはかなり乱暴な議論だと私は思う。なお、小林氏は六八三年や六八八年に帝国側が北アフリカでイスラーム軍を撃破できたのは、コンスタンスの政策が「花開いた」(一六三頁)のだというが、説得力は十分ではない。

⑩ 殺害年として六六九年説がある。cf. T. Greenwood, *A Corpus of*

- Early Medieval Armenian Inscription. *Dumbarton Oaks Papers* 58, 2004, pp.27-91,49.
- ⑩ *Theophanes*, pp.351-352 (AM 6160). cf. *Nikephoros*, ch.33. 小林氏は、皇帝はアフリカのイスラーム艦隊に対抗するため、艦隊建設を準備していたと推測する(「コンスタンティヌス二世」一五八頁)。ありえる推測だが、あまりに時間がかかりすぎているのではないだろうか。第三章で紹介する多くの事例を考慮すれば、艦隊の建設は長くても一、二年の時間であれば十分である。そもそも、カルタゴ総督府の艦隊を活用すれば、北アフリカで軍事活動を展開することは十分可能だと思われる。
- ⑪ *Theophanes*, p.352 (AM 6160).
- ⑫ Dionysius of Tel-Mahre. *Secular History*. in: A. Palmer (tr.). *The Seventh Century in the West-Syrian Chronicle*. Liverpool, 1993, p. 193.
- ⑬ Chabot, J. B. (ed./tr.). *Chronique de Michel le Syrien*. Patristiche Jacobe d'Antioche 1166-1199, vol.2. Paris, 1902, pp.450-1; Boor, C. de. (ed.). *Georgius Monachus Chronicon*. Leipzig, 1899, vol.2, p.718. cf. Mango, p.491, a-b.
- ⑭ Brooks, F. W., *The Sicilian Expedition of Constantine IV*. *Byzantinische Zeitschrift* 17, 1908, pp.455-459.
- ⑮ *Theophanes*, p.351 (AM 6159).
- ⑯ Waltz, G. (Hrsg.). *Pauli Historia Langobardorum*. Hannover, 1878 (rep.1978) [MGH. *Scriptores rerum Germanicarum in usum scholarum separatim editi*, 48]. V-12, p.191. cf. *Liber pontificalis*, p.346. 『シシオス反乱に対し、周辺のイタリア、アフリカ、サルディニアの軍隊が反乱鎮圧に即応した、という記述からは、北アフリカに危機が迫っているのであれば、シチリア島だけに頼らずとも様々な対応があった可能性を感じる。
- ⑰ このコンスタンティヌス四世のシチリア遠征については、オストロゴルスキーも注記にて取り上げ、疑念を呈している。G・オストロゴルスキー(和田廣訳)『ビザンツ帝国史』(恒文社、二〇〇一年)一九四―一九五頁(原著一九六三年)。
- ⑱ *Theophanes*, pp.353-354 (AM 6165). *Nikephoros*, ch.34. cf. Mango, p.494 n.3.
- ⑳ *Theophanes*, p.353 (AM 6164).
- ㉑ *Theophanes*, p.356 (AM 6171).
- ㉒ *Theophanes*, pp.358-359 (AM 6171).

三 コンスタンティヌス二世からテオドシオス三世までの艦隊

コンスタンティヌス四世の息子ユステイニアノス二世(第一在位六八五―六九五)も一六歳と若くして帝位に就いた。彼の最初の治世には艦隊に関する情報はほとんどないが、教皇宛て命令書簡に記載された軍隊のリストの中に、カラビシアならしきものが登場することは先に述べたとおりである。^②

六九〇年頃の史料に、ユステイニアノス二世がイスラームとの和平協定を破りキプロス島の住民を移住させようとしたとある。この時は何らかの艦隊が出動したのだろう。^③

その後、六九五年にクーデタによりユステイニアノス二世から帝位を奪ったレオンティオス「54」は、六九七年にカルタゴを含む北アフリカがイスラーム軍に奪われたと知ると、「全ての

ローマ艦隊」を出撃させ、その司令官にはパトリキオスのヨハネス [2766] を指名した。この艦隊はカルタゴ市の奪回に成功し、その地で越冬した。しかしカリフが大規模な艦隊を派遣してくると、形勢は逆転、ビザンツ艦隊は増援を求めて首都方面へと撤退し、クレタ島まで引き返した。しかし、首都帰還を望まない将校たちに駆り立てられた兵士たちが反乱を起こす。キビュライオタのドゥルンガリオスのアプシマロスがティベリオス（三世）と改名して皇帝に選出されたのである（前述）^④。

ここに登場する「全てのローマ艦隊」というのはカラビシアノイのことなのだろうか。はっきりとは断定できない。「全てのローマ艦隊」という表現からは、首都近郊に存在したのであろう艦隊に加えて、本来小アジアの側が担当である独立艦隊（？）のキビュライオタイも遠征軍に加わったという推測も可能となる。

さて、七〇五年にブルガール人の支援を受けて帝位に返り咲いたユステイニアノス二世（第二在位七〇五―七一一）は、妻と子どもを残していたハザール汗国に艦隊を送ったが、多くの船が乗組員とともに嵐で沈んでしまったという。彼はあらためてクビクラリオスのテオヒュラクトス [8271] を送って妻子を首都に迎え、息子との共同統治を開始した。^⑤

七〇八年になるとユステイニアノスはブルガール人たちとの和

平を破棄し、騎兵テマタをトラキアへ渡し、艦隊を艦装して出陣した。アンキアロスに到着すると、皇帝はこの要塞の前で艦隊に碇を下ろさせ、騎兵軍に野営を命じた。しかし、ブルガール軍の襲撃を受けて部隊は壊滅し、皇帝は海路都へ逃げ帰った。^⑥

七一〇年になるとユステイニアノス二世は、かつて追放されていた黒海北岸、クリミア半島のケルソン市方面への報復作戦に出た。遠征艦隊は実に三度にわたり派遣された。

これらを箇条書きにしてまとめておこう。

① 指揮官…パトリキオスのマウロス=ベッソス [4914] とス

テファノス=アスマクトス [6981]

スパタリオスのエリアス [1474]（ヘリアス）を

ケルソンの新統括者とする

艦 船…大艦隊の建造^② 全種類の艦船…元老院議員と首都

役人・住人たちの寄付による

(*Nikephoros*, ch.45 の十万人は誇張だろう。貴顕

者の徴用というもおかしい)

目的…住民全員の虐殺

結果…有力者を多く処罰するも、町全体での虐殺はでき

ず、帰路 (*Nikephoros* によれば (ch.45, p.1081

25) 一〇月) に嵐で難破。死者7万3千人(明らかに誇張)

結果ハザール人の介入と停戦、逆に遠征軍は反乱者側に寝返る

② 指揮官：パトリキオスで税務長官のシリア人ゲオルギオス

前述のバルダネス・フィリッピコスを皇帝と欲呼し、艦隊を首都へ送る

[2105]、市総督Hハネス [2956]

トラケシオイのトゥルマルケス(師団長)のクリ

第三回の艦隊派遣に失敗したユステイニアノス二世は、ブルガ

ストフォロス [1093]

リアからの援軍三千を得た上で、事態を偵察するために小アジア

上記テマから三百名の武装兵

北岸のシノベまでオブシキオン軍とトラケシオイ軍の一部とで出陣したが、その間に首都が反乱軍の艦隊の手に落ち、彼は息子と

艦船：わずかな数の快速船・ロモン

ともに殺害された。享年四二歳であった。

目的：ハザールへの詫び、上記エリアスと蜂起者バルダ

最初の大艦隊が嵐で崩壊すると、さすがにすぐには多くの艦船

ネス・フィリッピコス [6150] の連行、一部の者

を用意することはできなかったようである。しかし、ユステイニ

の復讐

アノス二世は執念深く別の第三回の艦隊を準備して送り出してい

結果：ケルソン市民たちの策略により遠征隊の全員が殺

る。敵に寝返ったこの艦隊が首都へ攻め上ったわけだから、こち

害される

らも小規模であったとは思えない。ともかく、艦隊はある程度は

③ 指揮官：パトリキオスのマウロス・ベッソス

常設のものもあつたのであろうが、必要が生じた際には、その状

艦船：別の「大」cf. *Niephoros*, ch.45, p.110156-57)

況に応じて建造されたと言えそうである。

艦隊の建造：多くの攻城兵器や攻撃装備とともに

以上の三度の艦隊遠征に関連して、気になる点がある。それは

出撃

第二章で紹介した、『教皇の書』に登場するカラビシアノイの

目的：ケルソンの城壁と町全体の破壊、住民虐殺

トラテーゴスのテオフィロスの存在である。史料の記述によるか

ざり、教皇コンスタンティヌスは七一〇年一〇月五日に出航し、コンスタンティノーブルへ向かう途中でテオフィロスの出迎えを受けた。その後、首都で歓迎を受け、皇帝とはニコメディアで会見している。役目を終えた一行がローマに帰還するのは翌七一年一〇月二四日であった。そして、そのわずか三ヶ月後にユステイニアノス二世殺害の知らせが届いたという。^⑧

ユステイニアノス二世の殺害は同年一月初旬とされている。^⑨

ということは知らせが実際に届くのに二ヶ月を要したわけである。そこから推測すると、教皇一行が当初カラビシアノイのストラテegosと出会い、帝都に到着したのは早くとも七一年一月頃であろうか。

一方、ニケフォロス『歴史抄録』の伝えるところでは、ケルソンへの第一回遠征の帰路の嵐は一〇月とあり、これは確実に七一〇年秋の出来事である。そしてその後の一年の間に、さらに二度にわたり艦隊が派遣されたわけである。

筆者が目指したいのは、カラビシアノイのストラテegosは、首都が艦隊編成で大忙しの最中に教皇の出迎えに参上しているという事実である。繰り返すが、艦隊が水兵のみで活動することはほとんどない。通常は地上戦力である将兵が船に乗り込み（必要に応じて軍馬なども）、その艦隊と搭載軍の両方を統括する司令

官がそのつど任命される。七一年当時、カラビシアノイ艦隊は（少なくともストラテegosは）、首都からの遠征軍と行動を共にしなかつたのであろうか。

さて、ユステイニアノス二世から帝位を奪ったバルダネスロフイリツピコス [6150]（在位七一〇七―七二三年）に関しては、艦隊関連の情報はない。イスラーム帝国側が首都への新たな攻撃を準備する中、帝国の艦隊の整備を急がせたのは彼をクーデタで退位させ、帝位に就いた文官出身のアルテミオス、改名してアナスタシオス二世 [630]（在位七一三―七二五年）であった。彼は快速艦ドロモンやギリシア火を搭載した二段権船、そして大型船の建造に着手している。^⑩

さらにイスラームの艦隊がアレクサンドリアからリュキアのフェニックス（現フィニケ）に船舶建造のための糸杉を伐採に来ているとの噂が広まると、アナスタシオス二世は快速船を何隻か選び、これにオブシキオンの兵士たちを乗せてロドス島へ送り出した。彼は「他のローマの艦隊」にもそこへの集結を命じた。これら艦隊全体の司令官には、「分別があり経験豊かな」大教会（聖ソフィア）の輔祭で税務長官のヨハネス [2901] を任命した（ここでも税務長官という文官、しかも教会関係者らしき人物が抜擢される）。しかし、ロドス島に集まり、いざ出撃という段に

なって、オプシキオンの軍隊がこれに反対し、皇帝アナスタシオスに呪いの言葉を発して、司令官のヨハネスを亡き者にした。こうして艦隊は統制を失い、それぞれが故郷へ向かったという。オプシキオンの将兵は故郷の方向アドラミユッティオンに至り、そこで徴税役人のテオドシオス〔793〕(後の三世。在位七一一―七一七年)を見出し(彼は政治に関心などない人物で、山へと逃亡したが)、彼を捕えて皇帝に担ぎ出して、都へと攻め上った。^①

以上からは、艦隊は個々にいくつも存在していたという印象を受ける。首都の艦隊だけでなくエーゲ海の島々やテマールヘラスなどにも集結命令が出されたのだろうか。小アジア南岸に存在するキピュライオタイも同様だろうか。詳しいことは不明だが、カラビシアノイという統一された常設の艦隊の存在は想定しにくい。

皇帝アナスタシオス二世は反乱軍の動きを知ると、身内の者たちと自身が建設した艦隊に町を委ねて、首都を離れてビテュニアのニケーア(オプシキオンの領内!)に向かった。反乱軍は全オプシキオン軍を糾合し、輸送船を多く徴用して首都対岸のクリュソポリスに海と陸から到着した。ここで半年間にわたる首都攻防戦が展開されたが、最終的には反乱軍側がコンスタンティノープルを押さえた。叛徒たちは、町にいた皇帝側の役人たちや総主教ゲルマノス〔298〕らを捕らえ、ニケーアに連行して皇帝に突き

つけた。アナスタシオス二世は観念し、身の安全と引き替えに降伏、退位した。^②

以上が、第二回コンスタンティノープル包囲戦が始まる前、すなわちレオン三世が登極する前に起こった出来事の内、艦隊が関わった出来事のあらましである。

どの時期のどの艦隊がカラビシアノイであったのか、見定めることができるだろうか。そもそも、一定の艦船が集まるならば、それがカラビシアノイと認定されたのであろうか。筆者には常設の艦隊の姿は、明確には見えてこなかった。艦隊の司令と遠征軍全体の指揮者は別立て、というのが通例のようでもある。艦隊が必要に応じて創設されるとするならば、カラビシアノイという指揮権の存在はいよいよ危うさを増してくる。

- ① Theophanes, p.363 (AM 6178); Nikephoros, ch.38.
- ② この史料記述には、カラビシアノイと並んで、アフリカ、サルディニア、イタリアなどの軍隊が言及され、前章の注⑦の史料記述からは、これらの軍隊が名目的だけでなく、実際に活動していることが確認できる。なお、この史料に「シチリアへの言及はない」。
- ③ Theophanes, p.365 (AM 6183).
- ④ Theophanes, pp.370-371 (AM 6190); Nikephoros, ch.41.
- ⑤ Theophanes, pp.374-375 (AM 6197); Nikephoros, ch.42.
- ⑥ Theophanes, p.376 (AM 6200); Nikephoros, ch.43.
- ⑦ Theophanes, pp.377-381 (AM 6203); Nikephoros, ch.45.

- ⑧ *Liber pontificalis*, vol.1, p.391.
 ⑨ Grierson, P. *The Tombs and Orbits of the Byzantine Emperors* (337-1042). *Dumbarton Oaks Papers* 16, 1962, pp.50-51; Hollingworth, P. A., "Justinian II", *ODB*, p.1084-5.
 ⑩ *Theophanes*, p.384 (AM 6206).
 ⑪ *Nikephoros*, ch.50; *Theophanes*, p.385 (AM 6207).
 ⑫ *Theophanes*, pp.385-386 (AM 6207); *Nikephoros*, ch.51.

むすびにかえて——レオン三世と艦隊

以上見てきたように、七世紀から八世紀初頭のビザンツ艦隊は、史料状況の劣悪さもあり、その実態を把握することはかなり困難であることが明らかとなった。断片的な史料を整合的に説明するためには、相当に大胆な推測を提示する必要があるだろう。

残念なことに、このような史料状況は八世紀になっても大きくは変化しない。にもかかわらず、七一七年に帝位に就き、久しぶりに長期政権の樹立に成功したレオン三世の治世（七一一―七四一年）にビザンツ艦隊は新たな段階に入った、というのが通説である。紙幅も尽きたので、最後にレオン三世と艦隊の関わりを概観し、この時期のビザンツ海軍と皇帝（政権）との関わりについてまとめることにしたい。

レオン三世は、即位直後に起こったイスラーム軍による二度目

の首都包囲戦を戦い抜いた。そこでは「ギリシア火」を搭載したビザンツ艦隊の活躍が決定的な役割を果たし、皇帝自身も乗船して出撃したらしい^①。

一方、首都包囲が続く中、西方シチリア島ではストラテゴスのセルギオス [6594] が別の皇帝を擁立する事件が起きている（まもなく鎮圧^②）。さらに、レオン三世治下にはシチリア島へのイスラーム艦隊の攻撃に対し、ビザンツ艦隊の活動の活発化が認められる^③。けれども、同時期のエジプト・シリア方面へのビザンツ艦隊による攻撃の多発化と同様、これらの局地戦に皇帝政府の意向がどの程度反映されていたのかはよくわからない。

七二七年、ヘラスとキュクラデスの地域がレオンに反乱を起し、「大」艦隊で首都へと攻め上った。詳細は不明だが、ヘラス＝テマのトゥルマルケス（テマの副指令、師団長）であるアガツリアノス [113] とさらにステファノス [6894] なる人物が艦隊を率い、コスマス [4093] を皇帝に押し立てたという。けれどもこの艦隊は首都近郊で皇帝側の「ギリシア火」で武装した艦隊によって撃破され、反乱は鎮圧された^④。反乱者側の「大」艦隊とは在地のテマ艦隊なのか、そして首都を守ったのがカラビシアノイなのか。一切は不明である^⑤。

さらに七三二年、マネス [4690] なる人物がイタリアへ艦隊を

率いて行くように皇帝から命令を受けている。彼は史料に登場する最初の「海のテマ」キビュライオタイのストラテーゴスであった。通説では、ここにかつてのカラビシアノイ艦隊は解体され、小アジア南岸を拠点とするテマキビュライオタイに再編された、となる。けれども、司令官に与えられた任務が地域防衛ではなくイタリア遠征であった点は留意しておいてよいだろう。以上が、レオン三世と艦隊に関わる主な事実である。^⑩

本稿での筆者の分析からは、レオン三世も含め、当時のビザンツ皇帝たちの中に、特段「海に生き」「海上に活路を求める」勇敢な皇帝の姿を見出すことはできない。コンスタンス二世は艦隊決戦で大敗を喫し、ねらいが必ずしも明白とはいえない遠征を実施して、シラクサにて暗殺された。その息子コンスタンティノス四世は、ブルガール人に対して艦船で出撃したが、病を得てあえなく戦線離脱となった。五年に及ぶコンスタンティノール封鎖戦を戦い抜いたことは高く評価されるが、艦隊を用いての大きな作戦の詳細は不明であり、おそらく登極直後のシラクサ大遠征もなかったであろう。コンスタンティノス四世の息子ユスティニアノス二世は第一治世では海上作戦にはほとんど関わらず、第二治世では一転してケルソン市攻撃に艦船を大量に投入し、その結果自滅した。レオンティオス帝は大艦隊を派遣してカルタゴを救お

うとしたが、かえって政権を失う結果となった。テイペリオス三世とバルダネスフィリッピコススの治世に艦隊との関わりは認められない。アナスタシオス二世は首都決戦に備えて艦隊の増強に努めたが、その治世はごく短期間で軍事反乱により引退を余儀なくされた。彼を退位に追い込んだテオドシオス三世は、史料の記述からは気の毒としか言いようのない在位となった。^⑪

七世紀後半以降、約半世紀間に及ぶビザンツ皇帝たちの治世を海軍あるいは艦隊という視点から眺めた場合、全体として華しい姿は浮かんでこない。けれども、まさにこの時期に陸上では防衛体制の要としてテマ制が整備されていった。おそらくは艦隊についても、この時期の紆余曲折を経た後に、レオン三世期にテマ制の中へと組み込まれていったものと思われる。ただし、その功績を特定の皇帝や組織に帰することは史料状況により許されない。厳に慎むべきは、これを特定の皇帝や組織の事績と判断する議論なのである。テマ制の成立過程と同様、ビザンツ艦隊や「海のテマ」についても、より長期的なスパンの中で慎重に考察することが不可欠であるといえるだろう。

① Theophanes, pp.395-399 (AM 6209-6210); Nikephoros, ch.54, 56.

② Theophanes, p.398 (AM 6210); Nikephoros, ch.55, なお、すでに八世紀初頭にはシチリアは軍管区(テマ)となっていたことが確認され

№. *Liber pontificalis*, vol.1, pp.389-390.

- ③ 小林「レオン三世」二九頁。
 - ④ 同、二五頁。
 - ⑤ *Theophanes*, p.405 (AM 6218); *Nikephoros*, ch.60.
 - ⑥ ザッカマンは、皇帝側がキビュライオタイ、反乱者側の艦隊がカラビシアノイだったと推測している。cf. Zuckerman, op.cit. p.124.
 - ⑦ *Theophanes*, p.410 (AM 6224).
 - ⑧ また、他の海上の軍管区がエーゲ海とサモス島、そして首都近辺に設置されたという説もある。小林「レオン三世」二七頁。cf. McGee, E. 'Navy (ploimoi)', *ODB*, p.1444.
 - ⑨ 小林氏はレオンが即位前にイタリアに赴いたという説を提示しているが、「レオン三世」二八頁)、それが仮に事実だとしても、史料は地上作戦での功績についてのみ述べていて、彼が艦隊を指揮したとは述べていない。cf. Georgius Monachus, *Chronicon*, vol.2, p.737.
 - ⑩ レオン三世の治世全般については、拙稿「レオン三世政権とナマ」を参照。
 - ⑪ コンスタンス二世の治世については別稿を準備中である。
 - ⑫ 小林氏は、「レオン三世」論文の結論部分(三一―三二頁)で、七世紀から八世紀前半にかけての諸皇帝は「いわば海の軍人皇帝とでも表現できるような政策を指向して」いたと書いている。しかし、筆者はこの言葉の意味するところをはかりかねる。
- 「軍人皇帝」とはどのような皇帝のことをいうのだろうか。三世紀の危機の時代との類似点でもあるのだろうか。しかも、「軍人皇帝」には「海の」という形容辞が付加されている。しかし、本稿で考察した諸皇帝たちからは、特に「海に生きた」印象を受けることはなかったし、船に乗って活躍した事例は指を折るほどしかない。艦隊との関

わりも特に目立つわけではない。なおこの時期、軍務から帝位に就いたのはレオンテイオス(親征なし)、アプシマロス・テイペリオス三世(親征なし)とレオン三世(親征少々)のみである。

さらに、論文最末尾でレオン三世は「最後の『海の軍人皇帝』と呼ばれ、これが論文のタイトルともなっている。曰く、「レオン三世は、『海の軍人皇帝』の系譜に連なる最後の皇帝だったのである」。これは本当なのだろうか。

「軍人皇帝」も「海の皇帝」という用語も、あまり使いたくはないが、もしも使うとすればそれなりにあてはまる人物は他にいない。小アジアのテマの諸軍団を自ら率い、治世の多くを戦場に生き、ブルガリアを攻める際にはしばしば艦隊を動員し、しかもしばしば自ら乗船した上に最後はその船上で亡くなった人物、コンスタンティノス五世(在位七四一―七七五年)〔703〕である。「最後」と呼ばれたレオン三世の息子である。実際、小林氏がイスラーム艦隊への「決定的な勝利」とみなす七四七年のキプロス島沖の海戦は、このコンスタンティノス五世の治世の出来事であった(*Theophanes*, 424 (AM 6239))。

なるほど、コンスタンティノス五世は帝国の西方領土について無頓着な面があったかもしれない。だが、彼に続く皇帝たちも「海」に無縁であったわけではない。病弱で治世が短かったレオン四世〔820〕にしてもイタリアとの関係を保っており、その妃エイレーネー〔820〕の摂政期にはイタリアに軍隊が派遣されている。一方、小林氏が重視するニケフォロス一世〔826〕も、海を特に重視した皇帝とはかりは言い切れない。彼は地上戦で戦死している。ともかく「七世紀以降、レオン三世にいたる諸皇帝は、ビザンツ帝国にとって地中海、そして艦隊の持つ重要性を正確に認識していた」のかどうか、筆者には判断つきかねる。

Some Remarks on the Byzantine Navy
during the Period from c.650 to 730

by

NAKATANI Kōji

The Byzantine Empire had to deal with aggressive Islamic power not only in Asia Minor but also in the Mediterranean Sea during the 7th century. We see an increase in the number of references to the Byzantine fleets in the sources from this period, in particular from the second half of the 7th century. The Byzantine fleets played an important role in the political history of the Byzantine Empire being involved in changes of government as well as in the two campaigns in defense of Constantinople (674-8 and 717-8).

There is, however, insufficient information about the first Byzantine fleet, the so-called "Karabisianoï." The *Chronographia of Theophanes Confessor* and the *Breviarium of Patriarch Nichephorus*, two main Byzantine sources about 7th and 8th century, use the common noun *plouimon*, meaning fleet, and do not mention the Karabisianoï. Only Latin sources, the *Liber pontificalis*, and the hagiographical *Miracles of St. Demetrios*, and some archaeological data, i.e. lead seals, indicate the existence of some "strategoi of karabisianoï," meaning simply admirals of seamen.

In this report of my research, I point out various problems concerned with the formation and activities of the Karabisianoï fleets and their command by tracing the facts of the Byzantine navy in the Aegean and Mediterranean Sea in the second half of the 7th and the beginning of the 8th centuries which most recent studies have not examined in detail.

Fourteen major episodes that were concerned with the Byzantine fleets are dealt with. First, as regards the so-called "Battle of Mast" in 655, it is very difficult to determine whether the Karabisianoï constituted the main part of the Byzantine fleet or whether the Karabisianoï fleet was founded after the battle. Second, concerning the expedition of Emperor Constans II to the West (661-8) and his murder, it is not easy to indicate whether the foundation of new fleet was carried out by the emperor in Sicily or not. Third, in regard to the dubious expedition of Constantine IV to Sicily in 688, the emperor probably did not lead the fleet to this island. Fourth, regarding

the first blockade of the capital Constantinople in 674–8, historical sources do not supply enough information about the operation of the Byzantine fleets. Fifth, concerning the Bulgarian expedition by Constantine IV in 680, we know only that the emperor utilized a fleet to transport Anatolian soldiers to the Danube frontier. Sixth, as regards Justinian II's "*Iussio*" addressed to the pope in 687, many scholars have read *karabisiani* instead of the original term *kabarisiani* in "*Iussio*," but this reading is not supported by concrete collateral evidence. Seventh, concerning the expedition of the Byzantine fleets to Carthago and the later revolt in 698, it is impossible to determine whether this fleet was the Karabisianoi or not. Eighth, as for the Bulgarian expedition by emperor Justinian II in 708, the emperor also used a fleet to transport Anatolian soldiers to the Balkans. Ninth, in regard to the punitive expeditions to Cherson by Justinian II and his downfall, the Latin source indicates that "strategos of Karabisianoi" was active in Aegean Sea in the midst of the expeditions. Tenth, the Emperor Anastasios II planned a construction project for a new fleet in 715. Eleventh is the dispatch of Byzantine fleets to Rhodes and the revolt of the Opsikion army, which give the impression that the Byzantine navy was composed of an amalgam of regional fleets. Twelfth is the 2nd defense of Constantinople, but the organization of the Byzantine fleet that defended the capital is unclear. Thirteenth, as for the revolt of Hellas and Cyclades and sea battle in 726, it is unclear whether the Karabisianoi or Kibyrrhaiotai fleets had any relation to this battle. Fourteenth, the first mention of "strategos of the Kibyrrhaiotai theme" appears in 732, but the strategos, or admiral, acted not within the territory of his charge, the southern coast of Asia Minor, but in the Tyrrhenian Sea.

In these fourteen cases it is nearly impossible to attest the actual circumstances of the Kabarisianoi. In conclusion, I content that one must be very deliberate in arguing the formation and activities of the Byzantine navy or fleets during this period. As for the formative process of the maritime theme Kibyrrhaiotai, about which much is also unclear, I think that a comparison with those of the "themes" on land will be effective.